

冒險探偵譚

遠歩

比利品（ひりぴん）の天道（てんどう）は師走——二月を迎えて尚、絶対的な存在感を誇る。ギラギラという擬音が似合う日光は、容赦なく地べたを這い回る人間共を照らしつける。遊泳場に身を浸し、炭酸飲料でも呑気に飲んでいられたのならまた別の感想が湧くのかも知れないが、大抵の人間は我が身がそこにあるのを呪うしかない。

比利品の首府——呂宋（るそん）の港で、瑞穂本国——内地行きの船を待つ、中性的な顔立ちの少年もまた、その一人に属した。彼は小説家である。未だ素人の域は出ないが、行動力という部分に関しては本職に引けを取らない。それが証拠に、彼は題材を求めて、海賊の本場と俗に言われる比利品にまで足を運び、現地取材を敢行した。

だが、その現地取材の結果が芳しくないのは、彼の表情が物語る。海賊退治を実際に行う海軍の関係者は、「機密事項」を楯にして口を閉ざし、漁民や輸送船の乗組員などは、無責任な噂話ばかりを彼に聞かせ、およそ現実味とは程遠い事柄で幻滅を誘うばかりであった。

額に滲む汗をハンカチで拭いなら、彼は改めて落胆の意を込めたため息をついた。メモ帳に記されている話の数々は、客観的事実に従えば、レポート用紙一枚よりも薄っぺらい。こんなもの何の価値もない。内地から比利品に行き、そこで費やした宿泊費などを思えば、明らかな赤字超過——骨折り損のくたびれもうけとしか言いようがない。

こんなはずではなかったのに——と少年は今一度ため息をつく。こんな調子では内地に戻った後も満足に筆は進むまいと、前途に暗澹たるものを感じた。

そんな彼に声をかける者がある。

「何かありましたか？」

声のした方向に少年が顔を向けると、麦藁帽（むぎわらぼう）を目深に被った男がいる。半袖開襟のシャツに黒い吊りズボン姿。背丈は一問七尺はあるだろうか。瑞穂人男性としては背丈が高い方に入る。暑いのか扇子（せんす）で我が身をパタパタと扇いでいる。

男の問いかけに、少年はいささか投げやりな感じに答えた。「いえ何も。だから困っているのですが」

「ほう」男は少年の全身を一瞥してから言う。「物書きだからかな？」

写生帳を小脇に挟み、ベレー帽を被っている者を画家あるいはその志望者だと見抜くのは難しくないが、少年の姿や風貌には、物書きだと感じさせるものは何もない。一体どういうことだ——と不審人物を発見した時の、訝しむような光が少年の眼に宿る。

「怪しい者ではありませんよ」男は軽く手を上げて制した。敵意がないのを証明するつもりなのか、素性を名乗る。「僕は小説家をしているのです。暮林千榛（くればやしちはる）と言います。筆名(ペンネーム)は本名と同じですので、内地の書店にでも足を運んで貰えば、僕の作品を眼に出来るかと思いたすがね」

「暮林千榛」——その名前が持つ響きには聞き覚えがある。少年は頭のなかにある引き出しから、彼にまつわる部分を抜き出した。手をポンと叩いて口にする。

「冒険小説家の！」

「ご存じでいてくれたのなら光栄の至りです」

微笑んでから、暮林は麦藁帽を脱いだ。短く整えられた黒髪。形良く力強さを感じさせる眉。鷹の眼を想起させる輝きを有した双眸（そうぼう）。白色人種ほど高くはないが、それゆえに美術的な造形を持つ鼻。きりりと結ばれた男性的美を意識させる唇。匂うような良い男である。

その風貌は文士というよりも、銀幕のスタアのように、最近人気の活動写真に主役として参加すれば、必ずや人気が出るに違いないと思わせるだけの美しさ——凛々しさと言い換えても良い——を持つ暮林の顔に、少年は暫し見とれた。

ただ、いつまでもぼうとしていたわけではない。相手が名乗ったのに自分がまだなのに気づくと、少年は自己紹介をした。

「私は橘花良文（きっかふみ）と申します。物書きと言っても素人の域を出ませんが」少年はそこまで告げてから疑問に感じた部分に触れた。「ところで、先生はなぜ私が物書きだと判ったのですか？」

「別に難しい話ではありませんよ」暮林は軽く笑いながら答えた。「勘ですよ。君からは僕と同じ匂いがしたのです。何か面白い物事があるのなら、危険に踏み込んでもそれを知りたいと願う者の身体から放たれる空気が、僕の嗅覚（きゅうかく）を刺激したのです。それで何とはなしに話しかけてみたら、勘が的中しただけの話ですよ」

「勘に嗅覚——ですか」

「物書きを続けているとね、勘とか観察力が自然と身につくものなのです。だから、ああ、この人はこうなんだと、視ただけで当たりがつけられるようになる。小説のネタにしたいと考えるようになる。一種の職業病なのです。この仕事から足抜けするまで、永遠に完治する見込みのない病なのです」

「それで私はどう見えたのですか？」

「何か刺激を求めて遙々比留品まで来たのに、期待に添うようなものには、何も出会えなかった——そんなところに見えますね」

暮林はズバリと切り込んできた。まるで自分の内心を見透かしたかのような物言いに、橘花少年はぎくりと身を震わせた。相手が他人の一挙手一投足に眼を光らせ、そこから得た情報を元手に商売をしている——言わば「人間観察の専門家」とは言え、素直に感心してばかりもいられない。気持ちの悪さがある。

ただ、否定はしなかった。嘘をついても直ぐに見抜かれるような気がしたし、正直に心の内を漏らせば、何か面白い返事が来るのではないかと、この初対面の小説家に対し、妙な期待感を覚えたせいだ。

「その通りです。さすが先生」橘花は素直に認めて、助言を求めた。「先生に専門家として訊きますが、何か面白い話に出くわす方法はないものではないでしょうか？」

「必ず面白い話に出会う方法などありませんな」暮林はこの世に必勝法と呼べるものなど存在し

ないと否定した。その上で話を続けた。「ただしこつはあります。百聞は一見にしかずと昔から言いますが、その通りです。一〇〇人から話を聴くより、自分自身が危険に身を飛び込ませ、一度体験した方が早いことが間々あります」

「体験？」橘花少年は眼を瞬（しばた）かせた。「先生の作品には危険地帯に嬉々として飛び込んでいく主人公がよく出てきますが、まさかあれは実体験？」

「そこは職業秘密と言いましょか」暮林は微笑して話を打ち切る。そこに船の出港が間近なのを告げる汽笛が鳴る。

「乗りますか。内地に着くまでに何日かかかります。君と話をする時間もその間に充分取れるでしょう」

誤魔化された一一と感じながらも、橘花少年は促されるままに乗船客のなかに混じる。確かに時間は充分にあるのだ。焦る必要はないだろう。そう自らに言い聞かせる彼の眼に、明らかに人の眼を気にしながら階段を上る翁と若い娘の二人連れが映じた。

「あの二人……」

橘花は何か気にかかるものを感じたが、後がつかえていることから追求するのをやめた。つい先程にあんなことを言われたから、何もかも怪しく見えるのだとも思う。とにかく船室に着いてから後のことは決めようと考えた。

客船「菊川丸」は全長一〇〇間（メートル）、排水量三〇〇〇石（トン）、最大速力一五航里（ノット）を誇る。巡洋艦を思わせる性能であるが、実際この船の建造には海軍が絡んでいる。建造費の半額を海軍が負担し、戦時には徴用船舶として仮装巡洋艦――客船や輸送船に武装を施し、補助艦艇としたもの――に改造する取り決めが海軍と船主との間に交わされているのだ。

ただし、乗船している者たちにそれと感じさせるものは何もない。客室の造りや各区画の内装も、それなりの金を取る客船らしいものであり、出される食事もまずくはない。

橘花少年は、その食堂にいた。頼んだのは天竺（てんじく）名物のカレー。「菊川丸」の料理長が彼の地で修行したそうで、本格的なものを楽しめるのを売りにしている（本格的とは言え、瑞穂人の口に合うように、独特のアレンジを加えているが）。

頼んだ料理を待っていると、いつの間に来たのか、暮林が姿を見せた。

「同席しても良いかな？」

「構いません」

了承の意の返事をするのと同時に、暮林は同じ洋卓（テーブル）の前の席に座る。注文を取りに来た女給仕（ウエイトレス）に「牛肉カレーを一つ。野菜の盛り合わせ付で」と注文した。

「煙草（たばこ）吸っても良いかな？」暮林は懐から煙管（きせる）を取り出した。「食事の前後に吸うのが癖なんですよ」

「良いですよ」橘花は洋卓の中央に置かれていた灰皿を暮林の方に押しやる。

「それじゃ、失礼して」暮林は煙管に煙草を押し込むとすばすばと吸い出した。立ち上る紫煙からは独特の香りがする。きつくはないが人を選ぶ香りだ。

「ああ、うまい」

喫煙は瑞穂人の間では珍しくない趣味だ。けれども人によれば目の前で煙を吐かれることをかなり嫌うので、食事の席では喫煙許可を求める必要がある。橘花は煙草の匂いが嫌いではないので、あまり気にならないが、盛大に煙をふかす人だなどは感じた。

注文した料理が来るまでの間、二人は取り留めのない会話をした。国内外の作家では誰が好きなのか、好きな小説の種類（ジャンル）は――互いが興味のある範囲内での雑談。

「ところで先生は」橘花は作家としての先輩にして既に成功を収めている相手に、気になる部分を問いかけた。「ご自身の作品に書かれていることを実践してみせたことがあるのでしょうか？」

「随分直接的な質問だね」暮林は人の悪い笑みを浮かべた。「だが、若者が好奇心を素直に満たそうとする図は嫌いではないよ」

「どうなのですか？」橘花は重ねて訊ねた。暮林が主に著しているものは、冒険小説だ。幻の秘境に繰り出したり、犯罪組織の内部に潜入したり、海賊一味と海上で大決戦を展開したりと、一

般大衆に受けそうな話が多い（それがために、いわゆる文壇の偉いさんからは、『子供じみている』だの『大衆に媚びている』曲学阿世（きょくがくあせい）の輩だと散々な言われ方をしてるが）。

「取材と想像の賜物だと答えておこうか」暮林はにやにやした。「この世に犯罪ほど刺激的なことはないよ。だが、どんなにおもしろおかしい空想も、現実の出来事に及ぶことはないのさ。君ね、『事実は小説よりも奇なり』という格言はね、僕の経験に照らし合わせれば間違いのない真実なのだよ」

「具体的には？」

「そうだね」暮林は暫し思案して、さほど離れていない洋卓にいる二人連れを煙管で指し示した。「あの二人を視てどう思いますか？」

「あの二人――ですか？」橘花は眉を顰（しか）、眉間に皺を寄せた。

老人と若い娘の二人連れだ。前者は禿頭（とくとう）に丸眼鏡、鼻の下から口許を覆う白髭が特徴である。後者は浅黒い肌をしている。顔つきもどことなく瑞穂人とは異なり、比利品先住民と瑞穂人の間に設けられた娘だという感じがする。

「知り合いで？」

「いえ、そうではありません。船に乗るの時にですね、如何にも人目を気にしている風で、怪しく感じられたものですから、記憶に残っていたのです」

「ほう」暮林は眼を光らせた。「君はやはり僕に感性が近い。僕もあの二人のことが気になっていました。何か大きな秘密を抱えているようでね」

互いに目をつけた人物についての論評を述べている時、食事を続けている老人と若い娘のところに、女給仕が歩み寄ってきた。

「お客様、あるお方からこれを貴男(あなた)に渡すようにと」

女給仕はそう言うと、ハンカチに包まれた何かを老人に手渡した。老人は洋匙(スプーン)を置き、口許をナプキンで拭ってから、渡されたものが何なのかを確認する。するとどうであろうか。彼の顔から瞬間的に血の気が引き、丸眼鏡のレンズ越しにも明らかな視線の彷徨いが生じる。まるで裁判官から死刑宣告を受けた犯罪者のような有様だ。

「御父様、どうしたの？」若い娘が訊いた。今の言葉からも判るように、二人の関係はやはり親子なのだ。急に顔色を変えた父に訝しげな眼差しを向けている。

「こ、これを視てみろ――」老人はまるでマラリアにでも罹患したように、ブルブルと震えている。ハンカチに包まれていたものを指差した。

父にそう言われて、視線を転じた娘の顔からも血の気が一瞬で引いた。洋匙(スプーン)が手から滑り落ち、床に激突した。ガチャンという金属的な音が周囲に響く。

「まさか、そんな」娘は両手を口許に当てている。「彼らは確か――」

「認めたくないが事実だ。こんなものを送りつけてくるのは、奴らしかいない。誰が儂らの居場所をわざわざ突き止めて、こんな手の込んだ悪戯(いたずら)をするものか。奴らの生き残りが、この船のなかに潜んでいるのだ。儂らの一挙手一投足に眼を光らせ、脅しつけているのだ。お前たちはまだ俺たちの掌(てのひら)のなかだと高らかに宣言しているのだ」

老人は脳卒中でも起こしそうな勢いで捲し立てる。それを訊いていた娘も同意する。

「御父様、私、私、恐ろしい！」

歯の根も合わないという感じにガタガタと震える親子に、暮林は予想的中かと苦いものを呑んだような顔を向けた。人の眼のある場所で、こんなに怯えてみせるのだから、余程恐ろしい体験を積み重ねてきたに違いない。

「先生、あの親子連れ――」

「ああ。事件の匂いがぷんぷんとするよ。好奇心は猫を殺すとの注意喚起の一文があるが、こんな面白そうな話を前にして、分別を保つ方が難しいよ。君ね、判るかい？ 僕はね、心の底からわくわくしているのだよ。何か騒動が起きないかと期待しているのだよ。悲しい作家の性だね。君は僕を軽蔑するかい？」

「いえ」橘花は即座に否定した。「作家が話の種に遭遇してときめかない方がおかしいと私は思います。先生の反応はむしろ当然ですよ」

「では君も？」

「ええ。わくわくする気持ばかりが胸のなかで膨らんでいます」

「成程、君の感性はやはり僕に近いようだ！」

などと楽しげに二人が言い交わしている時、頼んでいた料理が届き始めた。うまそうな料理の匂いが鼻腔を刺激し、腹の虫を刹那の間に騒がせた。

「探偵をするのは腹ごしらえを済ませてからにしませんか？」

「同感だね」

二人は洋匙を手に取り、大盛りのカレーを食べ始める。その間に、謎の脅迫者からの登場宣言を受けた親子は、接客係の助けを受けて、ふらふらとした足取りで船室の中に戻っていった。

「菊川丸」は一〇航里――航里が時速一・八五二里なので、すなわち時速一八・五二里となる――の速力で、瑞穂本国を目指して進んでいた。呂宋島から北上し、琉球諸島を掠めて西京に入る予定なので、この調子で進めば、三日もあれば目的地に着く計算になる。

陸地から離れて暫（しばら）く経つと、明かりと呼べるものは星明かりしかない。橋道洋（きょうどうよう）の島々に植民都市を築いてきた瑞穂皇国の力も、洋上ど真ん中では意味を為さないようで、墨を流したような真暗闇（まっくらやみ）がひたすらに続く。迷信深い者であれば、自然と幽霊妖怪の類を想像したであろう。

そこを橘花少年は見つめている。彼は甲板の上にいる。夕食後に夜風に当たりに来たのだ。静かすぎる海に不気味なものを彼は微かに感じてもいる。

――何かあるのではないのかしら？

確信はない。単なる直感である。だが、第六感（シックスセンス）と呼べるものに、橘花は自信を有している。怪しいなと感じた時には、大抵それが的中するのだ。大体、如何に周囲に島のない海でも、何かしら生物がいて、そうしたものが場合によれば派手な音を立てるのに、黙（だんま）りが決め込まれているなど、おかしいではないか。

橘花少年は、以前に本で読んだ比利品の海賊衆たちの話を不意に思い出した。瑞穂の支配に甘んじるのを拒否した、比利品の先住民族たちが、反瑞穂を掲げる国外勢力と結託し、資金や武器の供与を受けている――というのが主な評価だ。

だが、事実は書籍に記載されているような、単純な話ばかりではない。軍事教官役との名目で、第三国出身者が海賊船のなかにいたり、借金で首が回らなくなった、などの理由で国元にいられなくなった瑞穂人が構成員のなかに含まれていたり、混沌を極めているのだ。

共通している部分は、この辺の海賊たちは、一様に気が荒いということだ。襲撃された客船は、その殆どが皆殺しにされている。ごく僅かな生き残りは、瑞穂政府との取引の材料に出来る政府高官や、身代金を期待できる金持連中だけだと言え、その凄まじさが判ろうか。

食い詰めた漁民や農民が拵（こしら）えた海賊団など、何が恐ろしかろうかと強がるのは簡単だが、彼らは比利品が大小数千の群島よりなる国家だということを利用して、海軍が送り込んできた討伐隊を幾度となく煙に巻いてきたとの実績を持つ。

成程、正面からの戦いであれば、旧式艦でも海軍の正規装備を持つ戦闘艦艇の方が有利であろう。撃ち負ける心配などない。だが、地理に精通していることを何よりの強みにしている海賊船を相手に、個艦性能の優位を誇って何になろう。他国の艦隊と国運を賭けて華々しく戦うのとは訳が違うのである。

正直なところ、こういう相手の戦いでは、戦艦など無用の長物であり、鼠を叩き殺すのに牛刀を持ちだしたような不格好さは否めない（蠅を落とすのに対空機関銃を用いるようなもの、との

言い方もあるが)。

海賊船にそんな韋駄天の船はない、と俗に言う。「菊川丸」が全速を発揮すれば一五航里なのだから、旧式の貨物船を改造し、他国の軍隊の放出品を無理矢理に載せただけの海賊船に追いつかれる道理などあるわけがない。まさか見張員全員が居眠りでもしない限り、近づいてきた不審船の姿に気づかないわけがない。

考えても仕方がない——と思うものの、一度気になり始めると、橘花はつい気を揉んでしまう。そこに、暮林がふらりと現れた。やあ、と片手を挙げて声をかけてくる。彼も涼みにでも来たものであろうか？ いやそうでもないらしい。首から頑丈そうな双眼鏡を下げているではないか。

天体観測をするにしても、双眼鏡は如何にもおかしい。橘花は暮林の意図を図りかねた。訝しげな眼差しを、彼の冒険小説家に対し向ける。

「先生、一体何を目的に来たのです？」

率直な言葉をぶつけてくる橘花に、暮林は一瞬の沈黙の後に双眼鏡を構えた。

「橘花くん、僕はね、今日面白いものを視られるような気がしてならないのだよ。だから来たのさ。君もそんな気がして来たのではないかな？」

質問に質問で返され、橘花は毒気を抜かれた気になる。涼みに来たのが第一の目的だが、確かに言われてみれば、何かおかしなものが視られるのではないか——との期待感も心のなかで自己主張していた。それに暮林が「何かある」と言うのであれば、本当に何か突拍子もないものが視られるかも知れない。

返事をせずに沈黙する橘花に構わずに、暮林は双眼鏡のなかの世界に没頭する。彼の眼には単なる暗闇も万華鏡（カレイドスコープ）にも劣らぬ絢爛豪華（けんらんごうか）な光景が展開されているのであろうか？ 端から見ているだけでは、見当も付かない。橘花はやきもきした。

「先生、何が見えるのですか？」

堪らず問いかける橘花に、暮林は視線も合わさずに——双眼鏡に目を合わせているのだから当然——にやりとした。まるで腕白坊主（わんぱくぼうず）がお気に入りの遊び道具を見つけた時のような顔つきだ。

「僕の予想通りだ。橘花くん、これを覗いてごらん」

手渡された双眼鏡はずしりときた。ゲルマニヤ製らしいのが、珐瑯（エナメル）で記されている文字から判る。一体何が見えたのだろう——橘花が強い好奇心と若干の恐怖心を縋い交ぜにした気分で、レンズ越しに映る世界を覗き込むことにする。

果たして、その双眼鏡には夜間暗視装置が組み込まれていた。色の識別は出来ないが、そこに何があるのかは楽に確認できた。暮林先生は何を眼にしたのかしら、と橘花が怪しいものを求める気持で、不審物を探すと、問題のものがいた。

漆黒とおぼしき塗装を施された船体。錨の直ぐ近く——船腹に鮮やかな骸骨の紋章が記してある。各所にごてごてと大砲を積んでいるのが見て取れる。どれだけ呑気かつ危機感に乏しい輩でも、まさかこれを遊覧船（ゆうらんせん）だとは思えない。

「海賊船!？」橘花は危うく双眼鏡を取り落としそうになる。

「ご名答」暮林は動じることなく同意した。

比利品の海賊は、島と島とが重なり合うような狭い海域で、小舟を中心とした襲撃をかけてくることの方が多い——と聴いていたのだが、派手な塗装と多数の武装により彩られた船を見せつけられると、橘花としては噂など当てにならないと思い知らされた次第だ。

「でも」橘花は相手との距離がまだあるので、混乱から立ち直れた。「『菊川丸』の速力は最大で一五航里です。それに精神感應者（テレパス）や無線機もある。振り切るのにはわかりませんが、海軍の応援も頼めますよ」

「常識に従えば確かに」暮林は全面的には同意しない。

「何か問題点が？」

「相手も莫迦（ばか）ではない。その程度のことにはわきまえているはずだ。にもかかわらず、堂々と大型船を近づけてきた。何かあるべきだと踏むべきではないかな？」

「え？」

言われてみればその通りである。夜間洋上ど真ん中で海賊船に遭遇した、という混乱から「菊川丸」の乗組員らが回復した後、船の性能差と後方支援態勢の差が歴然とするのは目に見えている。比利品方面の海軍部隊は、面子をこれまでに何度か潰された経験があるから、救援要請をしさえすれば、何を置いてでも駆けつけてくるだろう。

だが、あれもこれも、通常通りの手順を踏めば、すなわち物事が順調に進むことを前提にしすぎてはいないか？ もし機関が故障すれば？ 救援要請が何かの手違いで海軍当局に届かなければどうなるのか？ 冷や汗が橘花少年の白い背中を滴り落ちた。

「僕の杞憂かも知れないが——」

不安げな顔を始めた橘花少年を気遣い、暮林はお茶を濁した。好奇心とは場数を踏んでいない限り、恐怖心に浸食されて消え果てる運命にあるものだとは彼は思い出したのだ。

されども、橘花少年の不安は、最悪の形で的中することになる。

不審船発見の報せは、夜間見張員を通じて、船長にもたらされていた。「菊川丸」の現在位置は、呂宋島と琉球本島の間点。咄嗟（とっさ）に進路を変更して、何処かの港に逃げ込める位置ではないし、海軍の境界区分という問題に直面しなければならない海域でもあった。何しろ呂宋島は海軍の「比利品方面艦隊」の管轄下に属し、琉球諸島はこれまた海軍の「橋道洋艦隊」の守備範囲に含まれるものだから、その両者の中間点に入る海域ともなると、「そちらは、そちらさんの担当区域」だとの意識が働きがちな場所なのだ。

卑近な例に譬えれば、A交番とB交番の境で事件が起きた。ところが、どちらの警官も面倒なので、積極的に犯人を逮捕しようとしな——と言い表せようか。

善良な一般市民からすれば、迷惑な話である。AだろうがBだろうが、犯人を捕まえてくれれば良いのに、領域侵犯になりかねないのと、業務内容の拡大を嫌がり、本来の職務を果たそうとしない。お役所仕事と言えはそこまでだが、泥棒に匕首（あいくち）を突きつけられた側としては、官僚機構の硬直ぶりを阿呆らしいと笑ってはいられない。

緊急避難場所もなければ、「海上のおまわりさん」も当てにならない状況と来れば、即座に取れる対応は決まっている。敵を振り切り逃げる（船長は無駄を承知で、精神感應者と電信技師に

救助要請（SOS）を出させているが）。

「海賊船はそんなに速くないはずだ。機関、全力出力！」

最大速度を長く出せば、当然ながら燃費が悪化するが、相手の視界の外に行くまでの辛抱だ——と、船長は機関部に命令を出す。

ところが、その機関部が問題を起こした。「菊川丸」は燃石を燃やして、そこから発生する蒸気により機関を動かすタイプの船なのだが、その船の心臓部を預かる者共が、何としたことか海賊一味とすり替わっていたのである。

缶（ボイラー）が全速発揮命令が出された直後に、叩き壊された。正確に言えば、燃石以外のものが片端から放り込まれ、室内を縦横に走り回る管が引き剥がされ、各所から蒸気が噴き出し、その動きを止めたのだ。機関部そのものが爆発せずに済んだのは、奇跡と言えようか。

次いで、通信室に控えていた精神感應者と電信技師らが、客に化けていた海賊衆に襲われ、全員が昏倒させられた。通信機材も破壊され、外部との遠距離連絡手段は瞬間的に喪われた。実に手早い仕事。

伝声管を通じて、これらの異変を察知した船長は、現場に船員たちを確認に行かせた。そして絶望的な状況を迎えたことを知る。機関損傷と通信不能を同時併発させられて、上手に対処できる者はそう多くはない。「菊川丸」船長は、そんなに優秀だと周りから思われていないが、職務遂行に影響が出るほど、無能でもない。

船長は被害を受けた部分の修復を命じると同時に、乗客たちを落ち着けるようにと指示を出した。航行不能にさせられて、外部との連絡が取れないのは確かに痛い、それよりも問題なのは、動揺した乗客たちが恐慌状態を来すことだと考えていたからだ。

果たして、そんな「菊川丸」の様子を、海賊団は把握していたのか、ゆっくりと近づいてきた彼らから、拡声器（スピーカー）越しの声が聴こえてくる。

「そこの船、止まれ！ 止まらないと沈めるぞ!!」

単なる脅しではない証拠——と言わんばかりに、海賊船は、搭載している大砲からどかんと一発撃ってくる。勿論威嚇射撃であるから、当たるような位置には撃ってこない。船尾から五〇間ほど離れたところに弾着し、水柱を立てた。

平和な客船が迎えた一大危機。船長はただ歯噛みをした——

海賊船からの警告は、一般乗船客の混乱をむしろ誘った。比物品の海賊は気が荒く、客船を襲った際に一般人を容赦なく皆殺しにするとの風聞は、ここでも信じられており、洋上ど真ん中で俄に世界最終戦争(ハルマゲドン) が起きたような感じになる。

しかもそこに来て、機関部損傷による停電——辛うじて惰性で進んでいた船の停止が重なると、收拾がつく要素がなくなる。接客係や俄に対応係に命じられた船員たちが、必死の形相で「慌てずに行動してください！」と呼びかけたところで、世間一般的には「普通の人」に属する乗客たちが、突然非日常に放り込まれて、冷静に振る舞えるわけがないのだ。

そんな大混乱が続く船内に降りてきた暮林と橘花は、暮林が持っていた携帯型照明(ハンドライト)を片手に、客室の方へと進んでいた。泣き叫ぶ女子供の悲鳴に胸が痛まないでもないが、彼らを助けには行かない。こういう状況下で下手に場を鎮(しず)めようとすると逆効果なのと、それよりも優先せねばならない事柄があるからだった。

「先生、一体何があるんですか？」

暗闇により恐怖感を誘う要素たり得ている木製階段をギシギシと踏み締めながら、橘花は暮林に訊ねた。誘われるままに行動を共にしてしまい、その意図を確認していないのを、今更ながらに思い出したからだ。

「なあに、難しい話ではないよ」暮林は足許を照らしながら進んでいく。「行けば君にも直ぐ判るさ」

「はあ」

あまり自信たっぷりに言い切られたものだから、橘花はそれ以上質問できなくなる。その代わりに恐ろしい想像が胸のなかで雷雲のように、俄に成長を始めた。

この人は本当に暮林先生なのかしら？ もしかしたら、海賊の仲間で、実は全部手引きしていたのではあるまいか？ だとすれば、火事場泥棒的な行為をするために、こんな真似をしているのではないか？ 自分を誘ったのは、やたらと積極的に話しかけてきたのは、もしかしたら好みの風貌をしていたから、ドサクサ紛れに拉致するつもりでいるのではなからうか？

幽霊の正体とは、大抵が人の恐怖心である。そこに恐ろしい存在がいると思うと、単なる枯れ木ですら妖怪に見えてくるものだ。ましてや相手が生きている人間ともなると、その素性が知れていないと、無限の恐怖感を誘う。この人は、今見せている顔の裏に何を潜ませているのか判らない——と。

いわゆる臆病風(おくびょうかぜ)、この場から逃げ出したいくて堪らないという奇妙な気分に含まれながらも、橘花少年は暮林の後に続く。蜘蛛(くも)の巣か足許を這い回る鼠(ねずみ)かゴキブリでもいれば、恥も外聞もなく「ギャッ」とでも喚(わめ)いて逃げ出すきっかけが得られるのだが、掃除の行き届いた客船ゆえに、そんな都合の良いものは存在しない。

急に逃げ出すのも逆に危ないのではないか――と踏ん切りをつけかねて歩き続けていた時、不意に暮林の足が止まる。彼の背中にドスンと当たってしまう。

「先生？」

「着いたよ。ここが目的地さ」

金属板（プレート）に「一〇五号室」と記されているのが、明かりにより確認できた。客室のようだ。こんな状況下に人を訪ねてどうするのかしら？ 大体この騒ぎなのだ。もう何処かに逃げ出している――救命艇（ライフボート）を使わない限り、船外に脱出できないが――のではあるまいか？

橘花少年が訝しむなか、暮林は扉を二度三度と軽く叩いた。

「怪しい者ではありません。僕は探偵なのです。何かお力になれるかと思い、参上したのです。どうか開けてくれませんか？」

探偵？ 作家ではないのしら？ 奇妙な自己紹介に橘花が首を傾げていると、程なくして扉が軋(きし)んだ音立てながら開いた。日に焼けた肌をした娘さんが立っていた。

あれは夕食の時に、何か妙な贈物を視て、卒倒しかけた親子の片割れではないか。どういうことなのかと橘花は驚く。

「失礼しますよ」一礼した暮林は、室内へと入る。その後に橘花も続く。

さほど広くない船室内は、備え付けの洋灯（ランプ）によりほのかに照らされていた。寝台に憔悴(しょうすい)した感じの禿頭の老人が寝かされている様が見て取れた。彼は死神に腕を掴まれた病人のように、苦しげに「ウウウ……」と唸り声を上げている。

やはりこの親子は、今回の騒ぎに関係があるのだろうか？ 緊張に強張る身体を無理に動かし、唾を飲み下した橘花少年が暮林の言葉を待っていると、

「比利品の鮫（ヒリピンス・シャーク）」

小さく、だが室内全体に響き渡るような調子で、暮林がそう言う。

途端に、娘さんは両手で口許を覆い、今や棺桶の住人になりかけている老人は、雷にでも撃たれたかのように身をびくりと震わせた。

「やはり、あれは鮫のものでしたか」

ため息と共に断じた暮林に、橘花は眼を瞬かせながら視線を向けた。「先生、鮫とは？」

同行者の質問に、暮林は「君も噂話ぐらいは耳にしたことがあるかと思うが……」と切り出した。

「比利品の鮫とはね、昔から比利品一帯を根城にしてきた大海賊団のことを指すのだよ。呂宋、利手(リーテ)、皆田尚(みんだなお)など、比利品の主要な島の近くで、大型船がやられた話となると、大抵は彼らの仕業なのだ。証拠を残さないためと称して、客船を襲うと乗客を皆殺しにしてきたのは、彼らなのだ」

「ええっ!？」

話を聴くうちに、橘花はぞっとした。客船の乗客全員が神隠しにでも遭ったかのように、全員が消えたと、単なる風聞として接する分には、学校の怪談や都市伝説に類するものだと、笑い飛ばすことが出来た。如何にも作り話らしく、嘘くさいではないか――と。

だが、実際に自分が海賊船の襲撃を受けた客船の乗客となり、当事者の一人にさせられた後だと、皆殺し説を笑うことは出来ない。海賊の衣を纏うた反瑞穂武装勢力に出くわした可能性も皆無ではないのだから。

震えそうになる身体を必死で押さえている橘花に構わず、暮林は話を進める。

「その比利品の鮫は、裏切者に対し鮫の牙を送るのを習（なら）わしにしているとか。そして裏切者だと認定された人物への制裁はただ一つ」

「それは死だ」暮林の言葉を、死にかけていた老人が突然遮る。寝台から身を起こし、丸眼鏡を掛ける。他人から迫りつつある運命を突きつけられて、逆に冷静さを取り戻したらしい。

「君はやたらとこの辺の海賊について詳しいようだが」

「認めてくださいましたか」暮林は微苦笑と共に頷いた。「襲撃者が質の悪い海賊一味であることを」

「否定しても始まらん」

「有り難い。ならば送りつけられたものを実際に見せてください。僕たちはもう当事者なのです。海賊に脅しつけられた被害者の一人なのです。貴男には情報を開示する義務があるはずですよ。違いますか？」

そう迫られて、老人は娘に布で包まれていた鮫の牙を出すように、視線で示した。娘は旅行鞆のなかに収められていた鮫の牙を取り出した。

実物を受け取った暮林は、懐から虫眼鏡を抜き出した。洋灯の近くに牙を置き、覗き込む。そこには比利品の古い文字で、「裏切者に制裁を！」と刻まれていた。

古風な脅迫文書と言えなくもないが、相手のやり口を知っている――いや、知りすぎている者からすれば、死神に鎌を喉元に突きつけられたような気分を催（もよお）させるのだろう。

橘花は、危機的状況に際し、俄に生氣を取り戻した老人の顔を凝視する。彼の顔つきや体つきからするに、皆殺しを第一義に掲げる、荒っぽい集団の構成員だったとは、到底思えないのだ。どうしたことなのだろうかと、世の奇妙さを嘔み締める。

少年の批判混じりの視線に気づいたものであろうか、娘が彼を睨み返す。

「父は好きこのんで海賊団の仲間になったのではありません。父は元々は客船の船医だったのです。乗っている船が奴らの襲撃を受け、拉致され、不本意な振舞を余儀なくされただけなのです」

娘さんの剣幕が凄まじいものだから、気圧された橘花は反射的に「すみません」と誤っていた。一応わびが入れたことを確認してから、今度は老人が話し始めた。

「私は米(よね)田(だ)という者だが、娘が言ったように、ある客船で医者をしていた。その時に奴らに乗っている船が襲われたのだ。単なる一般客船に過ぎなかったその船は、船長や乗客は全員殺された。私だけが拉致された。金持だからじゃない。その時に海賊団の首領が病気で、向こうの医者では手に負えないからと、とにかく医者だと名乗る者を向こうは集めていたんだ」

「米田医師、それで海賊団の首領は？」

「どうか治したよ。でなければ、私が生きていられたはずがない。それに私は医者だ。相手が盗賊団の頭目だろうが、悪徳議員だろうが、患者は治療せねばならない。そう信じてきたんだ。

それだけが私の誇りだ。だが、奴を治療したことは後悔している。治療が終われば解放されるものだと思っていたのだが、あいつは私のことを腕の良い医者だから手放す気にはなれない、裏切れば殺すまでだと脅しつけてきた。おかげで私は海賊の専門医にされてしまった。悪事に荷担する破目になったのだ」

治療した患者に脅迫される――それは医療関係者の悪夢、その一つではあるまいか？ 医療に携わる者の矜持として、怪我人や病人に分け隔てなく接したら、迷惑を被る人間が世間一般で量産されるなど、考えたくもない事柄であろう。

「でも貴男は脱出に成功した？」

「ああ。隙を見てな。漂流中に海軍の哨戒艇（パトロールシップ）に拾われ、九死に一生を得た。そこで海軍に奴らのねぐらの一つを教えて、私自身の罪を世間的には精算したのだ」

「司法取引――ですか」

珍しい話ではない。犯罪組織の構成員が、命惜しさに仲間を売り、警察や裁判所は密告者を情報提供を理由に無罪放免とするのだ。そしてその制度は、幾つかの犯罪組織の撲滅に実際役立ってきた。

「でも妙な話ですね」橘花が疑問を覚えた力所について触れる。「米田さんは不本意な参加を余儀なくされて、逃げ出ただけでしょう。比利品の鮫共がねぐらの一つを潰されたのは確かに痛いでしょうが、ここまで執拗に――言い方を変えれば大袈裟に、貴男を追いかけ回す必要があるのでしょうか？」

米田医師はぎくりと身を震わせた。彼自身には、自らが彼らに処刑されてもおかしくないだけの大罪を犯している――との感覚があるようだ。

「それは……それは……」

老医師は歯が抜け落ちた口をモグモグとやりながら、真実を告げるべきかどうか迷っている風だった。彼の娘がフォローを入れようとした時、

「米田さん、貴男は海賊共から宝の石を盗んだのではありませんか？」

暮林がズバリと切り込んだ。宝の石との抽象的な物言いに、橘花少年が首を傾げていると、がくりと項垂れた米田医師はそれを認めた。

「君の言う通りだ。私は彼らの宝を盗んだのだよ」

「御父様！」

「彼はもう当事者の一人なのだ。私が巻き込んでしまった。それに私が何をしたのかを見透かされている。隠す意味はない。見せなさい」

それでも娘さんは尚も躊躇（ちゅうちょ）していたが、再度促されると、旅行鞆から小箱を取り出した。指環を入れるものにしては大きく、オルゴールよりは小さいか。

おずおずとした手つきで、娘さんは施錠を解く。ぱかりと音立てて開いた小箱のなかには、暮林の言う宝の石――薄明かりのなかでも目映い光沢を放つ宝石がひしめいているではないか。瑞穂本国にいる宝石商でも、これほどの美品を幾つも揃えるのは難しいだろう。宝石収集家の貴族でも、こんな国宝級の代物は家宝と呼ぶであろう。

「凄い……これは？」宝石箱を覗き込みながら、橘花が訊いた。

「海賊船を逃げ出す時に、首領の部屋から行きがけの駄賃とばかりに持ち出したのだよ。私は彼の部屋に自由に出入りが出来たし、あの時は平常の精神ではなかったのだ。脱出がうまくいくわけがないと、どこか捨て鉢だったから、あいつらを最後に悔しがらせてやろうと、一番価値のある代物を盗み出したのだ」

「海軍に助けられた――と仰いましたね」暮林は遠慮なく切り込む。「その時に提出しなかったのですか？ 明らかに盗品でしょう」

比利品にも鉱山はあるが、鉄や燃石が取れるだけだ。宝石や金銀に代表される希少鉱物は取れない。仮に取れたところで、こんな貴重品がゴロゴロあるとも思われない。

「私も漂流中には、もし助かったらそうしようと考えていた。幾らこの宝石が美しくても、これは他人の血と涙を吸い込んでいる魔性の石だ。呪われているのだ。だが、いざ助けられてみると気が変わった。私は数年来の苦勞で身体のアチコチが痛んでいた。娑婆（しゃば）に還れたところで、人生をやり直すには手遅れだった」

「つまり悪魔が囁（ささや）いた――と」

「その通りだ。この宝石の半分もあれば、私は人生をやり直せる。喪われた時間を取り戻せる。余生を楽しく過ごせる。まさに悪魔の囁きだったよ」

「手荷物検査でバレるのでは？」橘花が疑問に触れた。漂流者が本当に漂流者かどうかを確かめるために、その種の検査は必ずする。逃走中の海賊が身分を偽装している可能性は皆無ではないし、伝染病に罹患（りかん）している場合もあるからである。

「勿論受けたさ。ただ、幸いなことに――御国からすれば最悪だが――海軍の担当官が腐った奴だった。私が宝石の一部を譲ることを条件に、黙っていてくれと持ちかけると、それを呑んだのだ。そいつは賄賂（わいろ）を受け取った以上はと、約束を遵守してくれた。私は海賊船に拉致されて、無理矢理働かされていた哀れな漂流者として処理された」

同情の念と自業自得という呆れが混淆する、奇妙な気分を橘花は覚えた。海賊共は確かに屑（くず）だが、盗品なのを承知で持ち出し、官憲を賄賂で買収して一財産を築くなど、許される真似ではない。どいつもこいつも押しも押されぬ大犯罪者ではないか。

軽蔑の念が少年の心のなかで過半数を占めかけた時、

「父は何も悪くありません！ 父は私たちのために、そんな真似をしたのです!!」

娘さんが悪意の念を遮るかのように怒鳴った。

「敬子（けいこ）――」米田医師の顔に困惑が宿った。

「母は身体が弱かったのです。治療のためにお金が必要だったのです。だから、だから、盗品なのを承知でこんな真似を――」

その時、船の近くに砲弾が落下する時特有の、どかんという重苦しい音と、強い揺れが周囲を包んだ。この一撃で、船内の混乱は更に加速したであろう。

「米田さん」暮林は僅かな動揺もない声で告げた。「僕は警察ではありません。貴男が他所で犯した犯罪の追求に興味はありません。訴えるつもりもない。僕が知りたいのは、なぜに貴男が彼らに襲われ、そしてこの時期に瑞穂本国行きの船に乗ったのかです」

「理由は簡単だよ」米田医師は両眼から涙を滴り落としながら告げた。「娘が今言ったようにね」

、妻は身体が弱かった。私が彼女の元に帰り着いた時にはね、もう殆ど手遅れだったのだよ。それでも金の力とは偉大なものだ。金の力に明かせた延命措置で、彼女はそれから数年間を生きた。医療設備の整った瑞穂本国ならもっと生きられたかも知れないが、彼女は比利品人だった。生まれ故郷の土になることが最後の望みだったのだよ。私は妻の葬儀を終えた後、私の生まれ故郷である瑞穂本国に骨を埋めようこの船に乗ったのだ」

「そこを折り悪く海賊衆に襲われた――と？」

米田医師は顔を両手で覆い、哄（こうしょう）を始めた。「人生とはままたまらないね。私はね、これでも苦学して医者になったんだ。家は貧乏で奨学（しょうがく）金がなければ、大学は疎か高校も行けなかったに違いない。努力して医者になった後は奨学金を返済するために働き、比利品にまで仕事のためだと赴いた。そこで理想の女性に出会えたのは良いが、その後の人生は二転三転――君ね、笑ってくれても良いんだよ？」

「ハハハハハ……」という乾いた笑い声が室内を満たした。教誨師（きょうかいし）が間もなく死刑にされようとしている囚人の懺悔（ざんげ）を聴いているような気分に、橘花はなる。

「米田医師」暮林は表情一つ変えずに告げた。「諦めるのは早いですよ」

泣き笑いをしていた老医師は、ピクリと眉を震わせた。

「どういうことかね？ 船の行き足は止まり、奴らはもうすぐ乗り込もうとしている。逃げ場などもう何処にもあるまい。お仕舞いなのだ」

「通常であればそうでしょう」暮林は自信たっぷりに言い切る。「だが、この船には僕がいる。希望ならまだありますよ」

「何……？」

「僕ももう当事者なのです。一緒くたにして殺されるのは御免被ります。まず自衛のために戦わせていただきますよ」

「海賊団を相手に、かね？」米田医師は疑わしげだ。「あいつらは数百人はいるぞ。君一人がどれだけ奮戦したところで――」

「僕一人ではありませんよ」暮林は隣に立つ橘花少年の肩を抱いた。

「彼も一緒です。一に一を足しても二になるとは限らないことを証明して見せますよ」

傍聴者兼傍観者のつもりでいた少年は、いきなり当事者にされたことの戸惑いも露（あらわ）に、自らを指差して顔をひくつかせた。

「え……なんで……？」

「百聞は一見にしかずというのを、作家の先輩として教えてあげよう。それに何もしなければ、君も海賊の餌食（えじき）になって水葬だぜ」

詐欺師とか悪魔（メフィストフェレス）だのは気がつけば隣にいるものだと、昔誰かが言っていた。橘花少年は、隣に佇（たたず）み、満面の笑みを浮かべている美形小説家（『自称探偵』）こそが、その仲間あるいは総元締めには違いないと、この時確信した……。

発電が止まった客船のなかは、幽霊船のように真暗だった。そのなかで機関関係者らが懸命の復旧作業を続けていた。手許を照らす洋灯の明かりだけが頼りで、この時ほどに視界が利かないことを呪い、盲でた者の苦しみに共感できたことはないであろう。

「まだ機関は復旧しないのか!？」

伝声管越しに聴こえる船長の声も虚しい。時間との競争は時に人間を苛立たせるが、この場合は恐怖を感じている者の方が多いか。

「駄目です！ あちこちがイカれていて、そう簡単には――」

機関関係者の声も虚しい。そうこうしている間に、海賊船は軍用小銃の射程範囲にまで接近していた。どれだけ腕の悪い砲手が適当に撃とうとも、外しようのない距離だ。

「せめて電信機が使えるば――」

海軍の境界線とでも言うべき海域だが、付近を演習中の軍艦が皆無とは限らない。急を聞いて駆けつけてくる可能性はある。だがそれも、救援信号をこちらが発し、向こうが気づいた時だ。沈黙を続けて助けを待つなど、何の意味もない。

船尾方向から船の形をした破局が迫り寄り、もはや何ら打つべき手がないかと思われたその時――

「待て！ 海賊共!!」

暴虐者に対し敢然と立ち向かう者が一人現れた。

「何だ、一体全体？」

現れた――と言っても優男（やさおとこ）で、迫力という意味においては失格である。海賊でなくても困惑したろう。本当にこの人は何をしに来たのかと、皆が訝る。

そうした周囲の思惑を無視し、注目の優男――暮林は、懐から小箱を取り出した。徐に施錠を解き、それを海賊たちに見せる。

「お前たちが欲しいのは、これだろう」

小箱のなかには目映い輝きがある。闇夜のなかにも鮮やかな光沢が。

海賊たちがざわめく。当然であろう。普段は比利品周辺海域に居座り、悪行を重ねている、ローカル（言い方を変えれば小心）な者たちが、危険を承知で外海に繰り出して求めた宝なのだ。喉から手が出るとの気分が適切な表現か。

「てめえ、米田の野郎はどうした!？」

片目に眼帯を当てた、絵本か紙芝居から抜け出したかのような面立ちをした、初老の男が叫んだ。視れば立派な身なりである。恐らく海賊団の首魁（しゅかい）であろう。

「米田医師からこれを預けられた！」暮林は負けずに言い返す。「彼は病気で寝ている。僕は米田医師の代理だ。こちらの要求は生命（いのち）の保証、それだけだ！」

「何だと!？」海賊首領は血走った目をぎよろぎよろさせた。「裏切者や俺たちの姿を視た連中を行かしておけるか！」

どのみち全員殺すつもりなら、止まらないと撃つぞという脅しは意味ないんじゃないかなあ... と暮林は相手の頭の悪さに呆れるが、助命を匂わせておいて降伏させ、その後に皆殺しにするという卑怯技は、昔から何処の国でもやっているかと思直した。

「だったら、僕たちもお前らが困る行為をするまでだ！」

再び怒鳴った暮林は、小箱のなかの光る石に手を伸ばすと、何としたことか、その一粒を海に投じた。キラキラと輝く存在が、漆黒の海のなかに沈んでいき、やがて光が見えなくなる。

「貴様、何をしやがる！」

「お前が取引に応じないからだ！」暮林は毅然とした態度を崩さない。「僕たちを宝石と引き替えに見逃すのか、それとも全部海に捨ててもらいたいのか！」

裂帛（れっぱく）の意思と共に放たれた怒声に、海賊たちは怯む。このままでは宝石全てが海の藻屑になるのではないか――との危惧の念が頭をもたげる。

「信じていないな」暮林は宝石箱を頭の上に掲げた。「一気に放り投げてやろうか？」

「ま、待て！」海賊首領は鉤爪（フック）になっている片手――何処までも基本的に忠実な奴だ――で暮林を制しようとした。

「お前たちの生命は助けよう。だから宝石を捨てるのはやめろ！」

「その保証は？」暮林は姿勢を崩さずに畳み掛ける。「宝石を渡して、少し離れたところでどかんとやられては堪らない」

「宝石を米田の野郎に持たせてこい」海賊首領は交渉に応じなければ埒（らち）があかないと諦めたいらしい。「俺たちが本当に用事があるのは、あいつだけだ。他の奴は見逃そう」

「なら機関部の修理が終わるまで待て！」

「菊川丸」の本来の最大速力は一五航里――突貫修理で果たしてそれだけの速度が出せるかどうかは未知数だが、航行不能状態で海のだ真ん中にいるよりか、僅かずつでも勧めた方が幾らかマシである。

それに機関部が完全に直ったところで、急に全速発揮できるものではないし、小銃を撃っても当たるような距離にいる相手から即座に離れられるわけでもない。「機関部の修理」云々は、相手にこちらの生命を助ける気があるのかどうかを確かめるための質問に過ぎない。

「良いだろう」

「『菊川丸』が動けるようになってから、短艇（ボート）で米田医師をお前たちの船にやらせる。それまで待つんだ」暮林は警戒を解かない。「それまでに怪しい動きがあれば、宝石箱ごと海に捨ててやるまでだ」

「判った！ 判ったから莫迦な真似はやめろ!!」

海賊共は顔色を赤から青へと目まぐるしく変えている。彼らにとり最大の財産である宝石の山を、暮林は交渉が決裂したら海に放り投げると断言しているのだから無理もない。船員や乗客たちは、このとんでもない遣り取りを、息を呑んで見守る。助かるのか？ それとも船諸共海の藻屑になるのか？ 文字通り命を懸けた綱渡りが継続されている。

暮林と海賊たちの舌戦を、別の観点から眺めている者がいる。橘花少年だ。彼は暮林が海に捨てたものが、実は宝石でないことを知っている。いやそれどころか、抱えている「宝石箱」自体が偽物であることを熟知している。

——先生も本職相手に良くやるなあ……。

暮林の作品には、己の命を懸けた交渉を平然とした顔でやり遂げる主人公が何人も出てくるが、その原型（モデル）は先生ご自身ではないかしら？ 橘花少年はそんなことを思うのである。あの異様な肝の据わり方は、数々の修羅場（しゅらば）をくぐり抜けてきた、何よりの証拠ではないだろうか。

だが、その暮林の悪戯（いたづら）に、半強制的形とは言え、参加することになった橘花には、芝居でも滅多に見られない場面を、他人事として愉（たの）しむ余裕はない。話を持ちかけられた時の驚きを胸のうちで再現するに留めた。

「機関部の修理の時間を稼ぐために、海賊共を騙す——ですって!？」

「そうだよ。機関部さえ直れば、こんな場所からはいつでもおさらばできるのだし、奴らに交渉する気があるのかどうかを確かめることも出来る」

「でも、どうやって？」

「方法は簡単さ。硝子（ガラス）玉の入っている箱を奴らの前に持って行き、そのなかの幾つかを奴らの目の前で捨ててやるのさ。暗闇で多少の距離がある。判るわけがないさ」

「かも知れませんが、気づかれたら逆上しますよ、相手が」

「そうだろうね」

「いきなり撃ちかけてくるかも。そうなったら——」

「橘花くん、危険を承知で正面から挑まなければ、くぐり抜けられない局面は、人生において何度かあるものなのだよ。死は逃げる者の背中こそ追うのさ」

「死は逃げる者の背中を……」

「ここは海の上。逃げ出せる場所など何処にもない。腹を括ろうぜ」

……あの人のように素直に危険に挑めれば、どれだけ幸せだろうかと、橘花は罵りに近い気分を覚えている。だが、暮林は無意味に過酷な条件を突きつけたのではなく、この局面を切り抜ける、唯一の道を提示してくれたのだ。腹を括るしかない。腹を。

脂汗だか冷や汗だか判らない汗を拭いながら、橘花は何度か深呼吸をした。自分に与えられた役目を全うしてみせる——と変装用の付け髭の位置を改めて確認する。そこに、

「機関部が復旧したぞ！」

との声が聴こえてくる。煙突から濛々（もうもう）とした煤煙（ばいえん）が立ち上がり始め、どうにか自力航行が可能な状態になったことを教えてくれる。

いよいよ出番か——唾を呑み鳴らした橘花は、自然と重たくなる足を、超人的な努力をし、ゆっくりと短艇のある場所まで向かうのだった。

暮林と橘花少年（偽米田医師）が乗り込んだ短艇が、海面へと向かいゆっくりと降ろされていく。その様は出家の儀式を執り行う時に似た空気を漂わせている。

短艇が海面に着水すると、暮林は鉤爪を外した。櫂（かい）を手にするるとギイギイと漕（こ）ぎ始めた。短艇は「菊川丸」からゆっくりと離れていく。推力を回復した客船自体が、ゆっくりと進み始めた関係もある。この時に砲撃されたらどうなるかを考えると、胃袋がよじれるぐらいに恐ろしい。

火急の場合だと、後から視ればなぜこんなことが――と疑問を感じるようなことが多々起きる。軍事を例に取れば、撤退途中の友軍と避難民でごった返している橋が、爆破係に無警告で吹き飛ばされた――との話が幾つも伝わっている。この話の怖い部分は、極端な例としてそれが記載されていないことである。似たような話が時と場所を変えて何度となく再現されたものだから、鉄火場では何が起きるのか判らない――との表現になるのだ。

今にしても、海賊共を散々に挑発した後なのだ。頭に血を上らせている砲手が、こちらを宝石ごと沈めにかかっても不思議はない。誰か一人頭がイカれている砲手がいれば、全ては終わりなのだ。

橘花はそのことを意識すると、因果を含まされていながらも、恐ろしくて堪らなくなる。自分はこのように臆病な人間だったのかと、叱りつける気分が湧かぬでもないが、とにかくこの場から逃げ出したいとの願望が、紙の上にぶちまけられた墨よりも早く、心のなかを満たしつつある。

「怖いのかい、橘花くん？」

櫂を慣れた手つきで漕ぎながら、暮林は震えそうになる我が身を抱き締めるようにしている橘花に問いかける。口調に少年を嘲る響きはない。

「まさか――と言いたいですが、そうですね」

否定したところで見抜かれる――と判断した橘花は、あっさり恐怖を認めて見せた。総大将の意向を無視した無警告砲撃、正体を見抜かれた後の相手の逆上、そもそも暮林の計略がうまくいくという保証が何もないことなどが、全てを放擲（ほうてき）したいとの願望を強めている。

「大丈夫だ」暮林は優しく諭すように告げた。

「先生のことを疑っているわけではありません」

つい先程に海賊たちと堂々と渡り合った暮林の勇姿が、橘花の胸のなかに刻み込まれている。この人は口先だけでなく、行動を伴う人だ――と。だが場慣れしていない彼は、恐怖心を完全に打ち消せないのだ。

「計算通りに進めば、君も僕も無傷で内地に帰れるよ」

「それは判っています。判っているんですが、こういう場は、その、初めてで――」

これは橘花少年が軟弱なのを意味しない。そもそも武装勢力と命懸けのバトルを演じる日常

など、日常のはずがないからだ。一般人の冒険など、精々が遠方への旅行——それも安全を確保した上で——だろう。暮林が特別なのである。

「無理もないか」暮林は微笑んだ。「僕も最初から要領を得ていたわけではないからね」

「先生も最初の頃は緊張したんですか？」

「ああ、したとも。最初から達人な奴なんているわけがない」

「意外ですね」

「何事も経験さ。教科書通りの行動でうまくいくことの方が少ない。命の遣り取りも必勝法などないが、続けているうちにコツを呑み込めてくる」

「嫌な慣れですね」

「かも知れない。だが——」暮林は真顔になる。「何があろうとも君だけは守り抜いてみせるよ」

その言葉に、橘花は赤面した。突然何を言い出すのかとばかりに、口をパクパクとさせる。老人に扮しているが、やはり中身は少年なのだった。

「先生、一体何を——」

「君を無理矢理に巻き込んだのは僕だからね。責任を取る」

「責任！　なんて別に——何だかんだで先生に従うのを決めたのは、その、私ですから、お気になさらずに」

「僕はこんなだがそこまで無責任にはなれない。それに君は——」

そこまで暮林が言った時、海賊船の前に着いた。海賊首領が大声で呼びかけてくる。

「約束は守ったぞ！　今度はお前たちの番だ!!」

ついに始まる最終決戦、正念場。

「さあ、始めようか。僕たちの戦いを」暮林は不敵に微笑んだ。

「米田の奴を宝石ごと置いていけ！」海賊首領が怒鳴る。我慢に我慢を重ねてきたのか、爆発寸前の活火山を思わせる勢いがある。

「米田医師は病気だ」暮林は船上にいる首領の顔を見やりながら応じた。「お前たちの方から迎えに来い」

「何だと!?　てめえいい加減にしろ！　こっちが下手に出ればつけあがりやがって!!」

「宝石はまだこちらの掌中（しょうちゅう）にある！」暮林は強気を崩さない。

海賊首領は歯をギリギリと噛み鳴らした。ここまでコケにされたのは、実のところ久し振りなのだろう。日頃は海軍の討伐隊をきりきり舞いにさせてきた男が、何処の馬の骨ともわからぬ優男に舐められているのだから無理もあるまい。

「判った。俺自身が行こう！」

「親分！」

周囲の部下が自ら短艇に赴こうとする首領を押し留めようとするが、彼は聞き分けない。

「あいつはこの俺に戦いを挑んでいるんだぞ！　後に退けるか!!」

一喝されると周囲も引き下がる。強気を貫くことにより生きながらえてきた組織の長なので、凄まじると誰も文句が言えなくなるのだ。

——そうだ。来い！

そうした遣り取りを、暮林は黙って見つめている。単なる下っ端を寄越されるよりも、逆上しやすい総大将が来てくれた方が、その後の展開は好ましい。

縄梯子（なわばしご）が海賊船から降ろされる。海賊首領、それを器用に使い降りていく。短艇まであと少しの距離となり、彼はひらりと飛び降りた。短艇がぎりしと音立てて傾く。

「さあ、約束を果たしてもらおうぜ」

海賊首領は、橘花少年が扮する偽米田医師の方へと歩み寄る。彼からすれば、目の前にいるのは、大切な宝物を盗んだ、憎んでも憎み足りぬ仇敵（きゅうてき）である。自らが命懸けで収集してきたものを掠めた相手なのだ。もしかしたら、親の敵（かたき）よりも恨みが深いのかも知れない。

目深に被っている偽米田医師の帽子を、海賊首領は荒々しい手つきで剥ぎ取る。彼の視界に現れたのは、髪の毛と泣き別れた禿げた頭——などではなく、若さに黒々と輝いた少年の頭髪である。これには彼は驚き、眼を白黒とさせた。

「貴様！ この俺を騙したのか!？」

「騙し討ちはお前たちの方が得意だろう？」

そう答えた暮林の右手には、いつの間にやら拳銃が握られている。四州（ししゅう）一八式拳銃。つい数年前に瑞穂陸海軍に正式装備として採用された回転式拳銃（リボルバー）である。

安全装置が外されるカチリという音が響き、緊張感が一気に周囲を満たす。

「この俺を殺すつもりか？ そんな真似をしたら、子分共が黙っちゃいないぞ。こんなちっぽけな短艇、砲撃一発で木端微塵（こっぱみじん）よ」

追い詰められて尚、海賊首領は命乞いなどという無様な真似はしない。暴れん坊で好き放題をしている印象のある輩であるが、それだけに自尊心が強いのだろう。

「だろうな。僕はお前を殺すつもりはないよ」

暮林は銃口を海賊首領の眉間にピタリと合わせたまま、その意を伝えた。

「人質にするつもりか？」

「ご名答。命知らずの海賊衆とは言え、まさか大切な親分ごと僕たちを吹き飛ばすような真似はするまい。安全圏に逃げ込むまでの間、お前には担保になって貰う。撃ちかけられたら相応の手続きをするまでさ」

何とも大胆不敵な物言いである。この冒険小説家は、悪名知れ渡った海賊の親玉を人質に取り、この死地から脱する腹でいるのだ。

「成程。貴様は生命がきちんと保たれるための保険に、この俺を選んだのだな。悪くない目の付け所だ。素人とはとても思えん」

俄に海賊首領は呵々大笑（かかたいしょう）する。羊を前にして急に追い詰められたので、気でも触れたのであろうか？ いやそんなはずはない。血走ってこそいるが、彼の眼には正気の色があるではないか。暮林は相手の意図を咄嗟に見抜いた。

「橘花くん、頭を下げろ！」

「え!？」

意味が判らないまま、橘花少年は身を伏せた。するとその途端に、海賊首領の鉤爪が火を帯びて突入してきたではないか。軍隊で通信用に用いられている噴進弾（ロケット）を、海賊首領は仕込み杖の要領で我が身に備えていたのである。

橘花は暮林の言葉に沿って回避行動を取ったから、直撃を免れた。だが、相方を気遣って回避の指示を出していた暮林は、左肩にそれを掠めさせられ、意外に派手に出血した。慌てて放たれた銃撃も、明後日の方向だ。相手に掠り傷の一つも与えていない。

生じた隙を衝いて、海賊首領は海にどぼんと飛び込んでいた。海上生活が長い彼は、皮のなかの河童(かっぱ)もかくやと思わせる泳ぎ達者なところを見せ、拳銃の射程距離から逃れてしまう。

「先生！」

左肩から血をドクドクと流している暮林に、橘花少年は不安げな眼差しを向ける。自分を気遣わなければ、こんなことには――との後悔の色がある。

「大丈夫だ」暮林は負傷カ所を押さえながら応じた。「海賊の親玉を人質にする作戦は失敗した。早くここから離れよう。作戦をB案の方に移行する」

「は、はい！」ここで慌てては駄目だ――と自らに言い聞かせて、橘花はこの短艇に仕込まれていた機能を活用することにした。発動機に付いている把手（とって）付の縄を引く。すると力強い脈動が短艇全体を包んだ。

そう。実はこの短艇はまだ珍しい発動機付短艇（モーターボート）なのだ。船舶に使用される燃料が、燃石が主流のなか、黒油を用いて動く発動機を搭載している珍船。航続距離はさほどではないが、短距離の速度や機動性においては、これに優るものはそうはない。

「行くぞ！　こうなればいよいよ命懸けだ」

絶望的な状況に置かれながらも、何処か楽しげな風情を崩さずに、暮林は出発を告げる。果たしてこの先に鬼が出るのか蛇が顔を覗かせるのか判然としないが、この人といれば、少なくとも狩られるだけの羊として死ぬことはなさそうだ――と橘花少年は強い振動に全身を揺さぶられながら思った。

逆上した獣（けだもの）を相手にした戦いとは、我が身が軍隊を思わせる武装で固められていても、不安を残すものである。ましてや、対戦相手が海軍の討伐隊を困らせている海賊団ともなると、命の危険は呼吸するかのように感じられる。

「あいつら、余程頭に來たみたいだな。滅茶苦茶に撃ってきている」

短艇の直ぐ近くに落下した砲弾は、視界を塞ぐだけでなく、短艇そのものを転覆させかねない威力を持つ。海軍の正規戦闘艦艇であれば、海賊如きが装備する大砲の砲弾など容易に跳ね返せたであろうが、ランプの魔神でもない限り、この場にいないものを即座に呼び寄せるなど不可能であろう。

「そりゃ怒りますよ！」橘花少年は舌を噛みそうになりながらも、暮林に反論する。「宝石は手に入らないわ、人質は偽物だわ、これで怒らない方が変です！」

「君も言うね！」暮林は楽しそうに応じた。「だがその通りだ！」

多少の距離が開けたおかげで、恐ろしいのそれでも砲弾だけになっている。機関銃や小銃による銃撃など、高速移動目標を叩くのに向いていないのだ。余程の数で撃ちかけるか、あるいは弾幕を張るかしないと、単なる弾の無駄遣いだ（威嚇の意味はあるのかも知れないが）。

それにしても二人とも余裕がある。一步間違えば挽肉にされかねない状況下にある者たちには到底見えない。それもそのはず、実はこれは闇雲な――自棄糞（やけくそ）な逃走劇ではないからである。暮林が先程口にしたように、海賊首領を人質にするのを失敗した際の第二案に沿って動いているのだ。

単なる逃走であれば、やがて燃料が尽き果てて漂流するか、敵船の砲撃に打ち碎かれるしかないが、そこに計算と希望を絡めれば、何を恐れる必要があるだろうか？ 人間の命は一つだけだが、言い方を変えれば死んでも一度きりである。天空に輝く星々に比べれば、夢か幻かと疑いたくなるほどに寿命が短い人間。であるならば、一つだけの命、一度きりの人生を自分の好きなように昇華（しょうか）して何が悪いのか。

「あいつらは比利品周辺海域には詳しいが、この辺はさほどではないはずだ」暮林は手荒く応急処置した傷口から滲む血を気にする素振りも見せない。

「もうすぐだ。もうすぐのはずだ――」

ギリギリと歯を噛む冒険小説家の眼に、望んだ光景が映じ始めた。

ゴツゴツとした岩の柱がによきによきと生えている海の難所。まともな船乗りであれば、突入を躊躇するに違いないところだ。パッと見た感じでは判りづらいが、あちこちに浅瀬もある。岩柱に激突して大損害を受けるか、はたまた座礁して立ち往生するか――そう言われれば、近づくのですら嫌がるだろう。

「相手が頭に血を上らせている獣でなければ、多分乗って来るまい」

暮林自身そう思う。もし相手が追跡を諦めるのであれば、ここに暫くの間、籠城を決め込むまでだ。短艇ならば止まってしまえば、この難所に居座れる。手出しできなくなる。相手が迷っている間に、「菊川丸」は遠方に逃げられるだろう。それに、海賊船に向かう前に打っておいた布石が機能するはずだ。

「先生の言っていた通りですね！」橘花少年が妙なところで感心する。「絵に描いたような難所が、本当に存在するとは！」

「さっきの海賊の親玉を視たろう！」暮林は操船に神経を向けながら答える。「莫迦みたいな奴がこの世には本当にいる。頭から決めてかかっているはいかん。真実は自分の眼で確かめるんだ。幻でない限り、それは確かにあるのだから――」

会話が Continuing しているうちに、発動機付短艇は問題の難所に差し掛かる。高速発揮している短艇が、岩の塊(かたまり)に突撃などした日には、一瞬で粉微塵(こなみじん)――乗っていた人間諸共海の藻屑であろう。何しろ発動機には黒油がまだたっぷり残っている。衝撃で引火すれば、大爆発は必至だ。激突寸前に運良く脱出できても、結局のところ爆風に巻き込まれて御陀仏(おだぶつ)だと思われる。

図体が小さいことを感謝できる瞬間とは、こういう時であろう。小回りが利くがゆえに、狭い区画を自由に動ける。多少無茶な操縦をしても、案外どうにかなるものなのだ。ただし、心臓にはものすごく悪いが。

「ぶつかる！　ぶつかる！」

橘花はそう叫んでいるつもりなのだが、実は言葉になっていない。意味を為さない唸り声のようなものが、唇から断続的に紡がれているだけだ。端から見れば、今にも溺死しそうな人間が、酸素を求めて口をパクパクと忙しく動かしているような図と評せようか。

「敵の砲弾とはまた違う怖さがあるな！」

一方の暮林は元気いっぱいだ。危険に身を踏み込ませると輝く人間がいるが、彼はその典型と言えるだろう。負傷の痛みなど何処吹く風で、発動機を限界までふかしている。

そんな対照的な二人が乗る発動機付短艇を、海賊船は怒り心頭に発したまま追いかけてくる。外洋航行能力を持つ船舶は、一定の大きさを持ち、狭い海域への侵入を苦手とする。またそうでなくても、短艇と外洋船では喫水線が大きく異なる。浅瀬だらけのところに突入すれば、船底部をそこに擦りつけ、大破座礁してしまうだろう。

「追いかけてくる！　追いかけてくる！」

「黙ってる！　舌を噛むぞ!!」

相変わらず意味を為さない言葉を発している(本人は恐怖を目一杯訴えているのだが、そうは聴こえない)橘花を暮林は叱りつける。彼は後方など視ていない。ひたすらに前方を――前に立ち塞がる岩柱に注目している。ここまでやって自滅したら莫迦の手本である。何が何でも回避しきらなければならない。

右に左にとジグザグに動き、直撃が死をもたらす柱を躲(かわ)す。おかげで短艇はガクンガクンと揺れ、乗り心地は最悪――乗り物酔いをしやすい人間なら、たちどころに嘔吐(おうと)して

いたに違いない——なのだが、正しい道筋を辿(たど)れている。

気づけば海賊船が遅れ始めている。図体の大きさが災いしているようだ。岩柱に船体がゴチゴチと当たり、それだけで自滅しそうな感じがする。このような場所に無理矢理侵入すればどうなるか、その基礎知識が欠けているように見える。

——あの様子なら、直に浅瀬に乗り上げて立ち往生だろう！

暮林はそう思う。そしてそれは半ばまでの中する。

浅瀬に乗り上げたらしい海賊船は、不意に動きを止めた。船体もかなり右に傾いている。通常であれば、このまま航行不能——船の墓場（サルガッソー）に迷い込んだ哀れな生贄よろしく、朽ち果てる定めにあった。だが、何としても宝石を取り戻す——自分たちをコケにした連中をぶち殺すという執念が、船そのものに移ったのか、海賊船は再び動き始めた。

「嘘っ！」

これにはさすがの暮林も驚いた。常識に従えば、これでケリが付いているはずなのに、戦いはまだ続いている。いやそもそも、こんな事態になること自体、非日常の出来事なのだが、無茶苦茶な動きを見せる海賊船の存在は、理屈とかそんなものを超越しているように映る。

「先生、これから一体どうするんですかぁ！」

「とにかく逃げよう」暮林は顔を引き攣（つ）らせながら操船を続けている。「時間を稼げば情勢は好転するはずだから——」

自力ではなく他力を本願とすると、唐突に破局が訪れることが多々ある。発動機付短艇に乗っている暮林・橘花コンビにもそれは当てはまった。浅瀬から脱出した海賊船が放った砲弾が、彼らの乗る発動機付短艇の直ぐ近くに落下し、二人を揃って空中に投げ出したのだ。

「わあっ！」

この言葉はほぼ同時に、異なる口から発せられた。人の背には翼がない。一度空中に放り出されたら、自分の意思で進むことも止まることも出来ない。重力の定めに従い、行き着く先に行き着くしかない。

基本的に何も無い海上で、その行き着く先と言え、普通なら海面である。では二人は哀れ海の藻屑と化したのかと言え、そうではない。神様はこの騒々しい連中を見捨てるのを惜しんだのか、数間ほどの大きさを持つ岩くれに不時着させたのである。より正確に言えば、空中でどうにか橘花少年を抱きかかえることに成功した暮林が、背中から無理矢理に着陸したのであるが。

あまり転がることなく、止まれた二人であるが、さすがに身体が痛んでいる。特に橘花少年を庇(かば)った暮林は先に負った傷を更に拵(か)げられる格好になり、苦悶に顔を歪めている。

「痛た……橘花くん、大丈夫かい？」

「人のことよりご自分の方を心配してくださいよ。血が……」

左肩を真赤に染めつつある怪我を視て、橘花は我が身のことより他人のことを気遣う暮林に、うまく表現できない批判の意を伝える。

「巻き込んだのは僕だからね。何があっても君は守らねばならないと思ってね」

世の中にいる全員が口約束を遵守してくれるものであれば、この世は恨み辛みのない快適な生活空間に違いない。大抵の者は書類作成をしていないことを理由に逃げを打つのだ。だが暮林

は違った。彼は本気で――何があっても守ると誓った相手を、身を挺して庇うつもりでいる。

「なぜ……なぜ、そこまでして……」

「一度口にしたことは曲げない。それが僕の主義なのさ」格好をつけながらも眉を顰める。やはり傷が痛むのだろう。

「格好つけすぎです」

「それが僕の個性ではないかな？」

茶化すように暮林が言った矢先、海賊船が二人の存在に気づき、迫ってきた。もう逃げ場はないし、抗戦継続手段にも乏しい。拳銃だけで数百人はいる海賊をどうしろと言うのか？

「絶体絶命――ですかね？」

「そのようだね」

不思議なことに、こんな状況になっても暮林は悲壮感を抱いていないようだ。橘花少年の身体から手を離し、二人で向かい合うような形で座る。

「砲撃できますかね？」そんな暮林に合わせてか、橘花少年も冷静だ。

「いや」暮林は否定した。「あれだけ莫迦にするような真似をしたのだからね、海賊首領自らが膾(なます)切りにしようとしているのではあるまいか」

「砲撃では手応えを感じられないから？」

「単純だが判り易い理屈だろう？」

「違いありませんね」

意味のない会話の応酬。だが、言葉を交わす余裕があることこそが、今は生きている証のように感じられた。一秒が通常よりも長いような、短いような、奇妙な感覚が二人を包む。

「ところで――」

「何ですか？」

「君の本名を教えてくださいませんか？ 橘花良文というのは、本当の名前ではないんでしょう？」

この問いかけに、橘花は驚いて目を見開いた。「気づいていたんですか？」

「僕の商売は観察力を必要としている」暮林は胸を張った。「目の前にいる相手が本名を名乗っているかどうかぐらい、顔を視れば判るさ」

「そうですか」橘花は艶(えん)然(ぜん)と微笑んだ。「私の本当の名前は――」

その時、二人の遣り取りを遮るかのように、砲撃の音がしてきた。ヒュルヒュルという独特の砲弾落下音が響き、二人に息を吞ませた。

暮林の予想が外れ、海賊船が撃ちかけてきたのであろうか？ 否である。砲声は遠くから響いてきて、弾着の衝撃は直ぐ近くから生じた。つまり、これは――

「助けが来たぞ！」

暮林の叫びは、現実の事象を全て現していた。付近を演習中の海軍の戦闘艦艇――二〇センチ砲を装備する一等巡洋艦が、海賊船を目掛けて砲弾を撃ち込んでいる。一発や二発ではない。断続的に強烈な威力を持つそれが命中している。まるでこれまでの鬱憤(うっぷん)を晴らすかのように。

「間に合った――のですね」橘花少年は呆然とした面持ちで呟く。

「ギリギリだったけどね、本当に」暮林は微苦笑した。「携帯型の『書き取りくん』がこんな形で役に立つとは思わなかったよ」

「書き取りくん」とは、官民間問わずに使用されている文書転送機である。利用可能な全時代の遺物から発明された、一種の超技術（オーヴァー・テクノロジー）であるが、通常は重要な書類の瞬間転送などに用いられる。何しろ高額商品で一回当たりの転送料も莫迦にならないので、便利ではあるがなかなか用いられない（にもかかわらず官民双方で使われているのは、『時は金なり』という金言を実行するためである）。

暮林が打った布石とは、その「書き取りくん」を用い、付近を航行中の海軍艦艇に助けを求めることであった。顔が広い彼は、海軍暗号を――しかも将官クラスが使用する呼び出し符丁を――一部だが知っており、それを利用したのである。人脈とは時に法の是非を問いたくなるような事柄を生じさせる。

「やっていることは無茶苦茶ですけどね。如何に皇国軍が文民統制（シビリアン・コントロール）下にあるとは言え、こんなことをしたのがバレたら、ただでは済みませんよ」

「誰も損をしていない。不幸にもなっていない。結果が全てさ」

そう言い交わした後、二人は顔を見合わせてグラグラと笑い合う。そこに朝日が水平線から顔を覗かせ、新しい一日が始まることを告げた。

「さて、今度こそ君の本当の名前を聴こうか？」

「そうですね」橘花少年は目許を擦りながら応じた。「私の本当の名前は――」

皇国首都（インペリアル・キャピタル）郊外――

居をそこにある一軒家に構えている暮林は、帰宅するや否や、早速今回の冒険譚を実録形式の小説として纏め始めた。自らが体験したことを書き記すのだから、筆の進みは極めて速い。四〇〇字詰原稿用紙四〇〇枚分の話、僅か一カ月程度で仕上げってしまう。

書き上げた原稿を担当編集者に引き渡し、一服をする（今度は行き先ぐらい告げてから旅行に行ってくれと半泣きで言われたが）。心のなかは次なる冒険のことで占められていた。作家にあるまじき事だが、暮林は家のなかでじっとしているのが駄目な口なのだ。一仕事が終わると、もう出かけたくなる。

さて、どうしようか――と愛用の煙管をふかしている最中、来客を告げる呼び鈴が、玄関先から響いてくる。担当ではないだろうし、事件の依頼か何かだろうか？ 暮林は事件の方から飛び込んでくるからと、副業で私立探偵もやっている（玄関扉の前に『暮林探偵事務所』と堂々と掲げているが、担当編集者も近隣住民も冗談だと考えている）。

「今行きます」

暮林は仕事部屋兼自室から声を出す。何か変化が生じることを期待する思いを抱えて。

玄関に着いて扉を開けると、そこには短い髪を綺麗に整えた、一〇代半ばとおぼしき少女が立っていた。白い肌に艶のある柳眉、長い睫毛に彩られた黒曜石のような瞳。高すぎず低すぎもしない形の良い鼻。光沢を放っている桃色の唇。その全身を包むのは、紺色を基調とした水兵（セーラー）服で、短めで膝が見え隠れする襜褕洋袴（プリーツスカート）が今時の女の子らしい。

「先生、来ちゃいました」少女は両手で旅行鞆を持ち、はにかみの笑みを浮かべた。

透き通るように澄んだ声。聞き覚えのないものであるが、暮林には相手の正体が見て取れた。僅かの中に懐かしさを感じるその相手の名を呼ぶ。

「久しぶりだね。橘花くん――いや千綾帰蝶（ちあやきちょう）さん」

「やっぱり直ぐに判りました？」橘花少年――いや、帰蝶は笑みを深くした。かつて少年として対面した相手と本来の姿で逢うのは、やはり気恥ずかしさがある。

「作り声と地声の差ぐらい判るさ」暮林は頭をガリガリと搔いた。「それに君の顔は印象に残りやすかったからね」

薄化粧をしているが、男装していた時の面影が帰蝶の顔には色濃く残されている。それは暮林の好みに完全にマッチしていて、忘れようにも忘れられなかった。

「前にも言いましたけど――橘花良文は筆名で、千綾帰蝶が本名なんです」帰蝶は頬に差した朱を更に濃くした。「比利品は内地とは違い、男性が多いので、護身の意を兼ねて男の格好をしていたのです。変装に関しては学生時代に一通り囓ったので、自信がありまして、幸い先生以外に見抜かれることはありませんでした」

「うん。見事なものだったよ」暮林は同意した。「僕以外には見抜けたとは到底思えない。ところで千綾さん、僕のところに何の御用事で？」

「先生、意地悪ですね。そんなことを仰って」帰蝶は頬を膨らませた。「弟子兼助手にしてくれるって言っていたのに、住所も教えてくれないんですから」

「住所？ あー」暮林は一月ばかりの前の情景を思い返す。弟子入り志願を受け付けた覚えはあるが、住所を教えた記憶はない。

「御免、言ってなかったね」

「私自分で探したんですから。それでここに来るまで時間がかかったんです」

「探偵としての素質があるかどうかを図るための試験だったと思ってくれないかな？」暮林は苦笑いをして、頬を搔いた。

「では試験結果は？」

「合格だ。一度言ったことを反故にするのも気に入らないし、君はちゃんと僕の目の前にいるからね。目標を探し当てられた、というわけで」

「有り難うございます！」帰蝶はぺこりと頭を下げた。

海賊との闘争の果てに、暮林は弟子兼助手を手に入れる運びとなった。この結果を冒険小説家兼私立探偵は予想していたのか否か、感激に顔を輝かせる美少女を照れ臭そうに視る表情からは窺えない。この場でただ一つ確かなのは、橋道洋上における私闘が嘘のように感じられるほどの平穏があることだ。

皇都は今日も平和である。

冒険探偵譚

<http://p.booklog.jp/book/104678>

著者：遠歩

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/44626211/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104678>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104678>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ